

【今週の注目疾患】

《水痘（みずぼうそう）》

2025年第52週の県内小児科定点医療機関における定点当たり報告数は、前週から増加し0.41（人）となった。2025年は直近5年間では高い水準で推移した（図1）。年齢群別では、近年0～4歳が占める割合は減少し、5～14歳が占める割合が増加する傾向にある（図2）。

図1: 2021年から2025年の県内の水痘の定点当たり報告数
（2025年第52週時点）

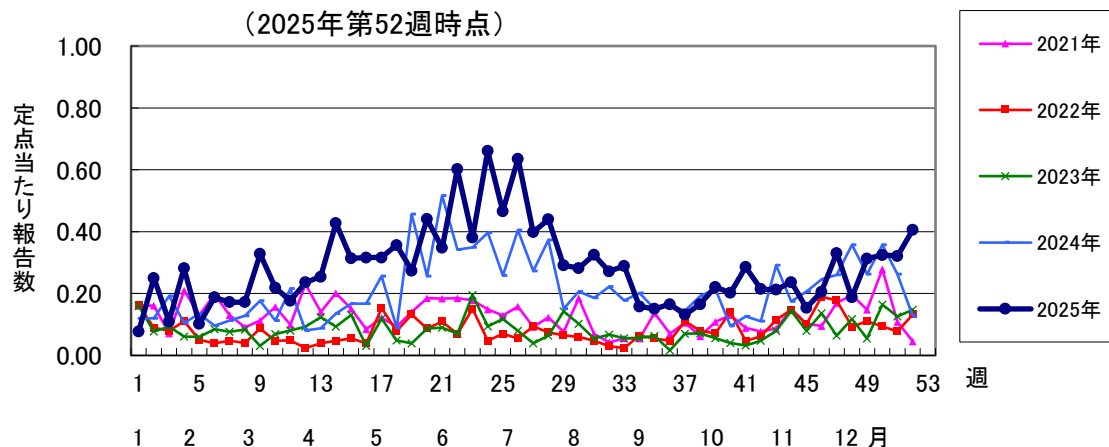
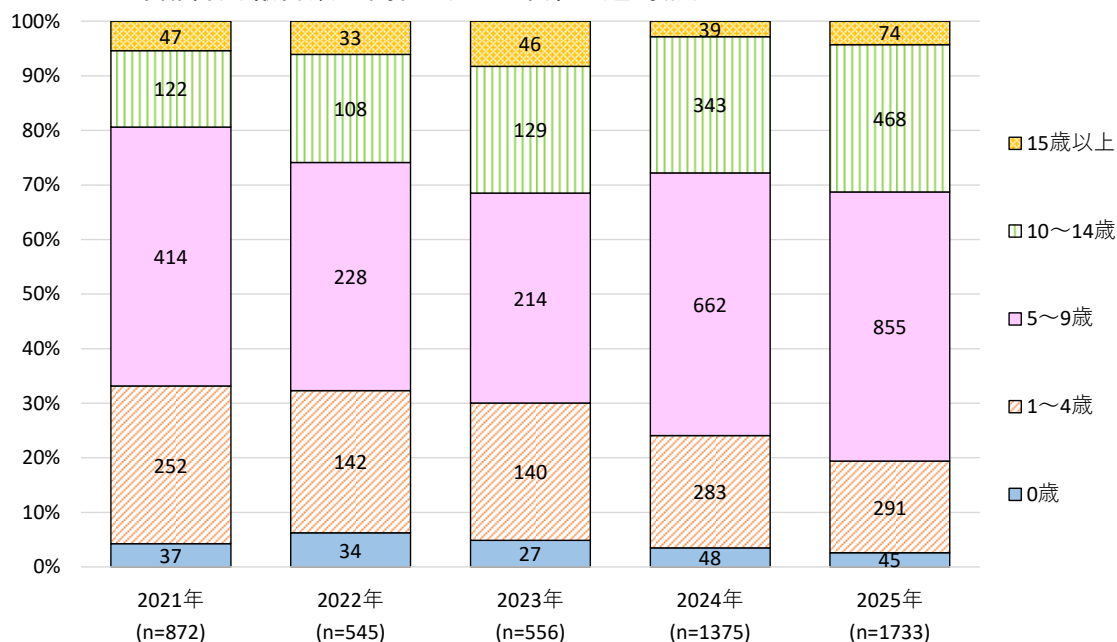
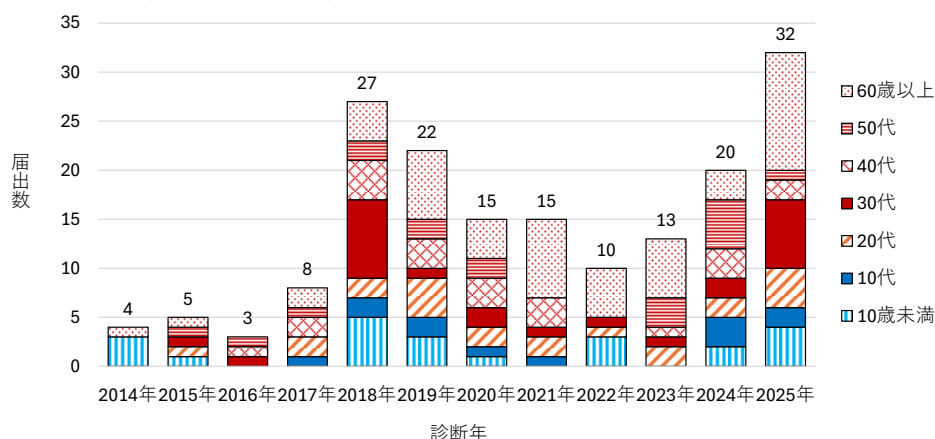


図2: 2021年～2025年に県内の小児科定点医療機関から報告のあった水痘患者の
年齢群別報告数・割合（2025年第52週時点）



また、2025年は32例の水痘（入院例）の届出があり、本疾患のサーベイランスが開始された2014年9月19日（2014年第38週）以降で最多となった（図3）。性別では、男性19例（59%）、女性13例（41%）であった。年齢群別では、60歳以上が12例（38%）と最も多く、次いで30代7例（22%）、10歳未満及び20代が各4例（各13%）と続いた。

図3：2014年から2025年の県内の水痘（入院例）の診断年別・年齢群別届出数
（2025年第52週時点）

水痘とは、いわゆる「みずぼうそう」のことで、水痘帯状疱疹ウイルスによって引き起こされる発疹性の病気である。空気感染、飛沫感染、接触感染により広がり、潜伏期間は感染から2週間程度とされている。発疹出現前から発熱が認められ、典型的な症例では、発疹は皮膚の表面が赤くなることから始まり、水疱、膿疱（粘度のある液体が含まれる水疱）を経て痂皮化して治癒するとされる。

水痘は主に小児の病気とされている。成人でも稀にみられるが、その場合は、重症化するリスクが高いとされている。また、出産5日前から出産2日後に母体が発症すると、妊婦自身が重症化する可能性に加えて、児が重症の新生児水痘を発症する可能性がある。

予防接種は1回の接種により重症の水痘をほぼ100%予防でき、2回の接種により軽症の水痘も含めてその発症を予防できると考えられている。水痘ワクチンの定期接種は、生後12月から生後36月（1歳の誕生日の前日から3歳の誕生日の前日まで）の間に2回の接種を行うこととなっている^{1,2)}。

定期接種の対象の方は、接種時期を確認の上、接種をお願いします。

■参考・引用

1)厚生労働省：水痘ワクチン

https://www.mhlw.go.jp/stf/seisakunitsuite/bunya/kenkou_iryuu/kenkou/kekkaku-kansenshou/yobou-sesshu/vaccine/chickenpox/index.html

2)厚生労働省：水痘（入院例に限る。）

<https://www.mhlw.go.jp/bunya/kenkou/kekkaku-kansenshou11/01-05-140912-2.html>

【Topics】

《年末年始に海外へ渡航された皆様へ》

感染症には、潜伏期間（感染してから発症するまでの期間）が数日から1週間以上と長いものもあり、渡航中や帰国直後に症状がなくても、しばらくしてから具合が悪くなる場合があります。その場合は、医療機関に事前に電話連絡して海外渡航歴があることを伝えた上で受診し、渡航先、滞在期間、現地での飲食状況、渡航先での活動内容、動物との接触の有無、ワクチン接種歴等についてお伝えください¹⁾。

■参考・引用

1)厚生労働省検疫所 FORTH：海外へ渡航される皆さまへ！

https://www.forth.go.jp/news/20220722_00001.html